

## 官立長崎師範学校蔵書中の「参考書」

鈴木 理 恵

(2012年10月2日受理)

### The Reference Books of Nagasaki Normal School

Rie Suzuki

**Abstract:** Nagasaki normal school was founded in Meiji 7, and was abolished in Meiji 11. According to the library catalogue, Nagasaki normal school possessed about 50,000 volumes when it was closed. Those books were classified into the textbooks of the elementary school, the textbooks of the normal school, the reference books, and the foreign books. In this paper, I clarified about the contents of the reference books. The reference books consist of about 930 kinds of Chinese books and Japanese books. Japanese books are divided into the books of the Edo period and Meiji era. Chinese books consist of about 160 kinds of 3,000 or more volumes. The books of the Edo period consist of about 250 kinds of about 3,000 volumes. The books of Meiji Era consist of about 500 kinds of about 3,000 volumes. There are many books of Japanese history. The contents of the books of the Meiji era are various.

Key words: Nagasaki normal school, collection of books, library catalogue

キーワード：官立師範学校、学校蔵書、蔵書目録

### はじめに

1874（明治7）年に第五大学区に設立された官立長崎師範学校は、1878（明治11）年2月の廃校までに154名の卒業生<sup>1)</sup>を輩出することによって、九州地方における教育普及に貢献し、小学校教員養成機関のモデルとなったと評価されている<sup>2)</sup>。短命に終わったとはいえ、濫觴期の教員養成のあり方をうかがうことのできる事例として貴重である。

官立長崎師範学校の実態を示す史料は乏しいが、現在確認されているところ、地方の官立師範学校のなかで蔵書目録が残されているのは長崎だけである。旧蔵書も一部ではあるが、まとまって残る。そこで、本研究は、官立長崎師範学校の蔵書分析を通して、初期の教員養成校に期待された機能・役割について明らかにしようとするものである。すでに官立長崎師範学校蔵書の概要については前稿で明らかにした<sup>3)</sup>。本稿は、官立長崎師範学校蔵書のなかで「参考書」と称された

書籍群について、その内実を明らかにするとともに、蒐集経緯を検証することを目的とするものである。

本稿で主として使用する史料は、旧官立長崎師範学校の蔵書の一部と、蔵書目録、諸規則・教則である<sup>4)</sup>。蔵書は、同校閉鎖ののち長崎県師範学校へと引き継がれたが、現在その多くは失われてしまった。残存するものは、長崎大学附属図書館によって保存管理されている<sup>5)</sup>。蔵書目録は、「旧長崎師範学校洋書目録」「旧長崎師範学校蔵書器目録」「旧長崎師範学校蔵書目録」の三種類が、設備・備品の目録や附属小学校の蔵書目録などとともに合冊されている。蔵書目録は、官立長崎師範学校閉鎖時に、設備や備品を長崎県の師範学校に引き継ぐために作成されたものと考えられる。諸規則・教則には長崎師範学校書籍局規則が含まれており、蔵書の管理方法がうかがえる。

蔵書目録に掲載された冊数・点数は、「旧長崎師範学校洋書目録」が699冊、「旧長崎師範学校蔵書器目録」が27,818点、「旧長崎師範学校蔵書目録」が10,599冊、「旧

長崎師範学校附属小学校蔵書目録」が10,566点である。『文部省第六年報』によれば、1878（明治11）年の官立長崎師範学校蔵書の内訳は、「洋書」696冊、「教科書」27,881冊、「参考書」9,907冊、「小学校用書」10,499冊であり、それぞれが上記の各目録中の書籍に相当すると考えられる。長崎師範学校書籍局規則が1875（明治8）年1月に制定されていることから、当時から書器縦覧所が設けられ、これらの書籍が教員や生徒の閲覧に供されていたことがうかがえる。

以下、第1節において、「旧長崎師範学校蔵書目録」と約2,900冊の現存書籍をもとに、「参考書」9,907冊の内容を明らかにする。第2節では、現存書籍に残された印記をおもな手掛かりに「参考書」の蒐集経緯について検証する。

## 1 「参考書」の内容分析

「旧長崎師範学校蔵書目録」（以下「目録」と略す）は、「箱入之部」が第1～50号、「端本之部」が第1・2号の合計52に分けられ、それぞれに書名・冊数・部数が記載されている。「箱入之部」第1号の冒頭部分の記載様式は以下のとおりである（（印）の部分には「廣田」という朱印が押されている）<sup>6)</sup>。

一増訂史記評林	（印）全五拾冊	（印）壹部
一補刻漢書評林	（印）全五拾冊	（印）壹部
一後漢書	（印）全六拾冊	（印）壹部
一三国志	（印）全四拾冊	（印）壹部
一國語定本	（印）全六冊	（印）壹部

書籍は、その内容分類によって箱を分けて保管されていたようである。まず、漢籍と和書が区別され、さらにそれぞれが時代や内容によって分けられている。和書は江戸時代のものと同治期の発行物とに大別されている。号（箱）によっては、漢籍と和書が、あるいは江戸時代と同治期のものが混在している。「箱入」という保管方法は書器縦覧所で恒常的におこなわれていたとは限らない。先述したように、本目録は官立長崎師範学校が閉鎖される際に作成されたと考えられるので、移管作業の過程で箱詰めされた可能性もある。ただ、目録によれば、ひとつの箱に和装本あるいは綫装本が300冊から400冊程度入れられていた点や、各号（箱）の内容分類が整っていることから、移管作業のためというより書器縦覧所での保管状態を示すものにとらえるのが妥当だろう。

表1は、目録中の「参考書」の冊数や分類をまとめたものである。目録に記載された書名を研究機関の提供するデータベースによって検索し、書籍を特定した。漢籍については漢籍データベースと国立国会図書

館の蔵書検索を併用し、江戸期の和書については国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースによって検索をおこなった。明治期刊行物については国立国会図書館の蔵書検索を利用した。検索で書籍を特定する場合には書名と刊行年を手掛かりとした。官立長崎師範学校が1878（明治11）年2月に閉鎖されたことから、原則的に同時期を刊行年の下限とした。書籍が現存する場合には編著者名や形態などの情報も利用した。

表1によれば、書籍927種の75%が1部ずつで、残りは書籍一種につき2部から51部の所蔵となっている。10部以上を所蔵していた書名とその部数をあげれば、『小学日本文典』（25部）、『会議弁』（30）、『日本地名字引』（35）、『大清三朝事略』（31）、『新律綱領』（24）、『植学略解』（15）、『修身教訓』（11）、『経済小学』（25）、『小学教育論』（11）、『教師必読』（11）、『教育史』（11）、『立憲政体略』（35）、『政体論』（10）、『改正洋算例題』（29）、『養生篇』（51）などである。

長崎師範学校書籍局規則によれば、「参考書」は書器縦覧所で閲覧するのが原則であったが、複数部数が所蔵されていた書籍については貸借が許されていた<sup>7)</sup>。

漢籍は、第1・4～6・9・14・16・19・35・36・43～48・50号にある。漢籍とみなされる書物は約160種約3,400冊に達し、「参考書」全種類の約17%、同冊数の約32%を占める。史部や子部が多いのが特徴的である。第1・9・16・19号には、幕末から明治初めにかけての和刻本が多く含まれる。

第6号を中心として漢訳洋書<sup>8)</sup>が集められている。表2に漢訳洋書と考えられる書籍をまとめた。現存しているものはその書籍をもとに、現存しないものについては『西学書目表』、国会図書館の蔵書検索、八耳俊文の研究<sup>9)</sup>をもとに発行年や発行所を示した。和刻本があることが明らかなものについてはその情報を示した。幕末から明治初期にかけて漢訳洋書が日本にもたらされたことが明らかにされている<sup>10)</sup>が、表2によれば官立長崎師範学校蔵書中の漢訳洋書で現存するものは和刻本が多い。

江戸期に筆写あるいは版行された和書は、第2・7・8号、第10～13・31号の一部、15・17・18・20・27号に収められ、約250種類約3,300冊に及ぶ。第7・8・10・15・18号は現存率が比較的高いが、現存するものには日記を中心として写本が多い傾向にある。

明治期に発行された和書は、第3号、第10～13・31号の一部、第21～26・28～30・32～34・49号、端本之部にある。明治7年以降に発行されたとみなされる和書は約300種にのぼり、全927種の3分の1を占める。

表1 「参考書」の書名と冊数

号	書名	種類	部数	冊数	おもな内容		現存種類	現存冊数	
					漢和の別	おもな分類		冊数	%
1	増訂史記評林～李氏蔵書	10	各1	316	漢籍	史部（和刻本）	9	205	64.9%
2	万葉集略解～梅園日記	31	1～3	375	江戸	辞書・語学・随筆・歴史物語など	23	293	78.1%
3	本草綱目啓蒙～泰西訓蒙図解	34	1～30	375	明治	本草・作文教育・文法など	1	3	0.8%
4	玉海～水滸伝	15	各1	378	漢籍	子部・史部	0	0	0.0%
5	大清律例刑案～赤壁帖	28	各1	461	漢籍	史部・集部・子部・経部	3	78	16.9%
6	普法戦記～代徴積拾綴	31	1～6	310	漢籍	子部・叢書部・史部（漢訳洋書）	7	42	13.5%
7	中右記～群書一覽	20	各1	274	江戸	日記・随筆・通史など	16	202	73.7%
8	日本書記通証～玉藻	17	各1	391	江戸	日記・通史・法制など	12	210	53.7%
9	礼記大全～老子道德経	19	各1	324	漢籍	子部・史部（和刻本）	7	53	16.4%
10	常山紀談～朝鮮征代記	33	1～10	374	江戸 明治	雑史・戦記・名鑑・教訓・ 絵画・体育など	15	148	39.6%
11	山城名勝志～ 日本地誌略卷三字引	62	1～36	377	江戸 明治	地誌・地理・地図	18	94	24.9%
12	孝義録～故事因縁集	57	各1	326	江戸	教訓・辞書・随筆・仮名草子・ 地誌・紀行・仏教など	28	169	51.8%
13	国史略～史略疑問釈文	66	1～7	413	明治	日本史・伝記・詩文など	23	165	40.0%
14	大明一統志～福惠全書	20	各1	375	漢籍	史部・子部	5	35	9.3%
15	武家諫懲記後正～ 白川侯伝心録	16	各1	389	江戸	伝記・雑史・随筆・法制など	13	305	78.4%
16	御批通鑑～雅俗幼学新書	33	1～31	369	漢籍	漢籍：子部・史部・集部（和 刻本）	11	47	12.7%
17	前々太平記～義経記	12	各1	317	江戸	戦記・雑史など	5	125	39.4%
18	盛長私記～正名緒言	33	各1	345	江戸	雑史・伝記・法制・戦記など	19	181	52.5%
19	明朝紀事本末・宋元通鑑	2	1～2	108	漢籍	史部（和刻本）	2	57	52.8%
20	大日本史	1	1	100	江戸		1	93	93.0%
21	万国公法～泰西国法論	29	1～24	144	明治	法制史・法律・議会・政治など	12	45	31.3%
22	養生浅説～小学博物書	41	1～15	180	明治	医学・化学・植物学など	9	32	17.8%
23	慈母教草～星学捷徑	21	1～11	107	明治	倫理学・物理学・自然科学など	1	12	11.2%
24	海外異伝～近世事情	36	1～4	114	明治	西洋史・伝記・日本史など	7	12	10.5%
25	世渡ノ杖～商家必用	12	1～5	87	明治	経済・貿易・商業	7	41	47.1%
26	経済小学～和蘭学制	22	1～25	167	明治	教育事情・行政・統計など	4	8	4.8%
27	大三河志・万天日録	2	各1	76	江戸	伝記・記録	1	44	57.9%
28	小学教育論～ 童蒙をしへ草	7	1～11	64	明治	教育	0	0	0.0%
29	万国政体論～ 印部諸税年表	21	1～35	249	明治	政治・法律など	5	34	13.7%
30	数学書～洋算例題	7	1～29	123	明治	数学	0	0	0.0%
31	分度余術～数学教授書	35	1～3	116	江戸 明治	和算・測量・数学・土木工学	12	22	19.0%
32	筆算通書～中外度量略表	21	1～2	82	明治	数学	2	5	6.1%
33	植物生理学～地文学	30	3～5	196	明治	叢書	1	2	1.0%
34	蒸汽篇～養生篇	18	1～51	154	明治	叢書	1	1	0.6%
35・36	資治通鑑	1	1	148	漢籍		1	104	70.3%
37～42	群書類従	1	1	658			0	0	0.0%
43～46	二十一史	1	1	400	漢籍		0	0	0.0%
47	淵鑑類函	1	1	200	漢籍		0	0	0.0%
48	佩文韻府	1	1	224	漢籍		0	0	0.0%
49	新條約書～心理学	26	1～9	79	明治	教育・書誌・自然科学など	6	8	10.1%
50	康熙字典	1	1	40	漢籍		0	0	0.0%
端本1	十八史略～希臘史略	13	各1	122	明治	西洋史・日本史など	3	21	17.2%
端本2	万国史略～書牘	40	各1	132	明治	西洋史・自然科学・経済など	2	9	6.8%
	合計	927		10,559			292	2,905	27.5%

註 (1) 本表は「旧長崎師範学校蔵書目録」にもとづいて作成した。

(2) 「書名」は目録中各号の最初と最後に記載されたものをあげた。

(3) 現存書については、報告書（本文註(3)）を参照。

(4) 「江戸」とは江戸時代に筆写・版行された書物を意味し、「明治」とは明治期に発行された書物を示す。

(5) 群書類従は江戸期か明治期か不明。

表2 漢訳洋書

号	書名	目録冊部数	現存冊数	撰訳人	出版地	出版者	出版年	典拠
6	普法戦記	8		張宗良口訳、王韜編	東京	陸軍文庫	1878(明治11)	国会
6	化学鑑原	4		韋而司撰、伝蘭雅口訳、徐壽訳	上海	江南製造局	1871(同治10)	p. 186
6	化学初階	4		韋而司撰、嘉約翰口訳、何瞭然筆述	広州	博濟医局	1870(同治9)	p. 187
	(同和刻本)			市川央坡点	東京	小林新兵衛ほか	1873(明治6)	p. 88
6	器象顕真	2		白力蓋輯、伝蘭雅口訳、徐建寅筆述	上海	江南製造局	1872(同治11)	p. 193
	(同和刻本)			—	—	陸軍文庫	1875(明治8)	p. 193
6	園(円)錐曲線説	1		艾約瑟、李善蘭	金陵	—	1866(同治5)	西学
6	大英国志	2		米爾納撰、慕維廉訳	上海	墨海書館	1856(咸豊6)	p. 202
6	汽機新制	2		白爾格撰、伝蘭雅口訳、徐建寅筆述	上海	江南製造局	1873(同治12)	p. 192
6	防海新論	6		伝蘭雅、華衛芳	上海	江南製造局	1873(同治12)	西学
	(同和刻本)			—	—	—	1875(明治8)	国会
6	克虜伯砲説	2		金楷理、李鳳苞	上海	江南製造局	1872(同治11)	西学
6	水師操練	3		傅蘭雅、徐建寅	上海	江南製造局	1872(同治11)	西学
6	汽機発軋	4	2	英国美以納・白勞那合撰、英国偉烈口訳、徐壽筆述	[不明]	[不明]	[不明]	
6	化学分原	2		包門原著、蒲陸山撰、伝蘭雅口訳、徐建寅筆述	上海	江南製造局	1871(同治10)	p. 188
6	談天	6		侯失勒撰、偉烈亞力口訳、李善蘭筆述、趙元益筆述	上海	墨海書館	1859(咸豊9)序	p. 204
	(同和刻本)			英国侯失勒撰、英国偉烈亞力口訳、清李善蘭筆述、福田泉訓正	大阪	河内屋太助ほか	江戸末	国会
6	植物学	3		韋廉臣輯訳、艾約瑟統訳、李善蘭筆述	上海	墨海書館	1858(咸豊8)	pp. 196-197
	(同和刻本)			—	足利	—	1867(慶応3)	p. 197
6	金石識別	6		代那撰、瑪高温口訳、華衛芳筆述	上海	江南製造局	1871(同治10)	p. 193
6	地学浅积	8		雷伏兒著、瑪高温口訳、華衛芳筆述	上海	江南製造局	1873(同治12)	p. 204
6	四裔編年表	4		—	—	—	—	—
6	致富新書	2 (5部)		鮑留雲易編、平田宗敬校	東京	鈴木喜右衛門	1871(明治4)	国会
6	六合叢談	6	5	[不明]	東京	老皂館	明治期	
6	新約全書	1		—	蘇松上海	美華書館鉛印	1864(同治3)	国会
6	旧約全書	3		—	上海	美華書館鉛印	1865(同治4)	国会
6	地理全志	10 (2部)	5	大英慕維廉輯訳	東京・京都・大阪	三都書林	[不明]	国会
6	地理全志下編	5 (2部)	8	大英慕維廉輯訳	[不明]	[不明]	明治初期	
6	地球説略	3 (6部)	9	合衆国裨理哲著、箕作阮甫訓点	東京	老皂館	1871(明治4)か	
6	瀛環志略	10 (5部)	10	徐繼畲	大阪	米津清平	1861(文久1)	
6	円機活法	21	3	[不明]	[不明]	[不明]	[不明]	
6	重学	5		胡威立撰、艾約瑟口訳、李善蘭筆述	松江	—	1858(咸豊9)	p. 195
	(同和刻本)			ホウエール著、宮崎柳條筆述	東京	清風閣	1874(明治7)	p. 195
6	代微積拾級	3		羅密士撰、偉烈亞力口訳、李善蘭筆述	上海	墨海書館	1858(咸豊9)	p. 203
21	万国公法	6	4	[不明]	江戸	萬屋兵四郎	1865(慶応1)	
21	万国公法蠡管	8	6	美利堅丁韃良訳、亜米利加惠頓著、高谷龍洲注解、中村正道批閱	東京	北島茂兵衛	1876(明治9)	
21	全体新論	2	1	[不明]	江戸・大阪・京都	須原屋茂兵衛ほか	1856(安政4)	
32	代数学	5	4	英国伝蘭雅訳、清国華衛芳筆述、日本神保長致訓点	[不明]	[不明]	1875(明治8)	
49	博物新編後集一ノ巻	1		大森惟中編	—	青山堂	1875(明治8)	p. 216

註 (1) 典拠欄の略記は以下のとおり。国会：国会図書館蔵書検索，p.：八耳1999年目録中の頁，西学：『西学書目表』。

(2) 『普法戦記』は管見の限り，明治11年10月刊行のものが最も古い。『西学書目表』には1895(光緒21)年発行のものが掲載されている。

(3) 『四裔編年表』は1897(光緒23)年発行のものしか確認できない。

## 2 「参考書」の蒐集経緯

### (1) 官立宮城師範学校蔵書の蒐集方法

官立師範学校の蔵書がどのように蒐集されたのかについては、『文部省第六年報』（明治11年）に記載された官立宮城師範学校図書一覧表が手掛かりになる。

表3によれば、宮城師範学校における明治11年の蒐集ルートには、「新規購求」と「本省下付」があったことがわかる。「新規購求」の和漢書は、在来部数に比して約18.2%、在来冊数に比して約21.1%を占めている。「本省下付」については、文部省からどのような経緯でどのような種類の書籍が交付されていたのかわからないが、後述するように旧藩蔵書が含まれていた可能性がある。和漢書では「新規購求数」と「本省下付数」の合計冊数が6,099冊に及んだにもかかわらず、「払下数」が13,942冊にも及んだため、前年比で7,843冊の減少となっている。「払下」とはどこに払い下げられたものかわからない。官立長崎師範学校では生徒に書籍を払い下げることが認められていた<sup>11)</sup>が、表3の1万4千冊近くに及ぶ払下数は対生徒にしては多すぎる。

宮城師範学校では、1877（明治10）年に図書館を新築し、庫内に縦覧場を設置して教育に関する書籍器械から新聞雑誌などに至るまで約100点を蒐集して、教員と生徒に縦覧させたという。「学校ノ良否ハ主トシテ教員ノ良否ニ基キ其進歩及改良ハ教員自家ノ研究如何」に関わるという認識のもとに、積極的な購入を進めていたことが『文部省年報』の記載からうかがえる<sup>12)</sup>。

明治10年の宮城師範学校では、書籍器械の購入費として2,673円61銭4厘が充てられた。宮城師範学校の明治10年度の校費は、歳入が31,687円28銭9厘で、歳出が31,495円28銭であったから、書籍器械費は歳出の約8.5%を占めていた。明治11年についても図書充実策が継続されていたことが表3からうかがえる。

### (2) 明治初期の政府による集書過程

官立長崎師範学校蔵書の蒐集経緯について、現存書に残された印記を手掛かりに検証してみよう。蔵書印は旧蔵者のものである可能性が高いためである。表4に、印記のある書籍をあげた。そのほとんどは、江戸期に版行、あるいは筆写された和書である。

表4に見られる書籍が旧蔵者の手を離れて官立長崎師範学校に入った経緯や理由を直接に明らかにしてくれる史料は現在のところみつからない。ただ、明治初期の政府による集書過程<sup>13)</sup>を追うことで、その一端がうかがい知れる。

明治3年4月5日、華族や諸藩に対して1863（文久3）年以降の国事関連事績の記録の提出を命じた<sup>14)</sup>。

明治4年4月8日の太政官布告第176号は以下のように呼びかけ、別紙として「古写本日本紀十五巻」以下の通史や法制、有職故実に関する和書20点の目録が添付されている<sup>15)</sup>。

古書籍類別紙目録之通全部不存者並欠本等府藩県管内精細取調所蔵之者有之候へハ可申出事

但其他古本珍書等有之候へハ同様可申出事

明治4年5月23日の太政官布告第251号は、「古今時勢ノ変遷制度風俗ノ沿革ヲ考証シ候為メ」に各地方に残る古器旧物類の品目や所蔵人名を官庁から差し出すように指示した<sup>16)</sup>。別紙として「祭器ノ部」以下31の部に分けて品目を掲げている。そのなかに「古書籍並古経文ノ部」がある。

明治4年11月、文部省は各府県に旧藩蔵書の目録を提出させた<sup>17)</sup>。以下のように通達したあとに別紙雛形として提出すべき目録の様式を示している。

従前於各地方公費ヲ以取設之有諸学校或ハ文庫病院等所ニテ所蔵ノ書籍並ニ古器奇物ノ類ニ至迄別紙雛形ノ通無遺失取調来申正月月中可差出候事

一書籍図画一枚摺ノ書画ニ至迄現今蔵版ノ箇所或ハ

表3 官立宮城師範学校図書一覧表

名称		在来数	新規購求数		払下数	現在数	前年比較	
							増	減
和漢書	部	3,719	676	373	2,402	2,366	—	1,353
	冊	22,399	4,732	1,367	13,942	14,556	—	7,843
洋書	部	324	29	19	23	349	25	—
	冊	409	59	19	17	470	61	—
雑書	部	262	—	—	—	262	—	—
	冊	288	—	—	—	288	—	—
図画	組	368	—	—	119	250	—	118
	枚	595	—	—	238	358	—	237

註 『文部省第六年報』明治11年、pp.326-327による。

表4 印記のある書籍

号	書名	発行年・筆写年	冊数	印記
7	中右記	1860(万治1)写	15	白河・栗名・栗名文庫・立教館図書印・楽亭文庫
7	小右記	江戸時代写	6	白河文庫・栗名文庫・立教館図書印・蕉雨園蔵書
8	吏部王記	[筆写年不明]	10	白河文庫・栗名文庫・立教館図書印
10	筆塚	江戸末期～明治初期写	1	堀氏文庫
15	諸例類纂	[筆写年不明]	6	堀氏文庫
18	三秘集	[筆写年不明]	13	堀氏文庫
8	左経記	[筆写年不明]	10	朽木文庫
12	本朝智恵鑑	1713(正徳3)	5	牘庫
15	君臣言行録	江戸時代写	5	水山文庫
15	武家諫懲記後正	江戸時代写	84	翼輪堂蔵書記
15	武家諫懲記惣目録	[発行年不明]	1	翼輪堂蔵書記
15	武家諫懲記附録	[発行年不明]	19	翼輪堂蔵書記
2	みづかゝみ	江戸時代	3	学習館蔵書印
2	大鏡	江戸時代	8	学習館図書記
6	新刊校正増補圓機詩学活法全書	[発行年不明]	3	学習館蔵書印
18	統藩翰譜	江戸期筆写か	20	礼讓館図書印
12	白河燕談	享保己酉序	3	(解読不能)
7	三国塵滴問答	1706(宝永3)	9	(二文字、解読不能)
7	丹鶴叢書	江戸期か	7	□□蔵書
31	再訂算法	1798(寛政10)	1	□桂堂蔵書記
12	翁問答	1709(宝永6)	3	□田氏
13	内国史略	1874(明治7)	2	□野蔵書
17	関西陰徳太平記	1712(正徳2)	31	□彦
15	駿台雑話	1750(寛延3)	5	安藤文庫
2	和名類聚抄	江戸時代	5	医学校蔵書印
9	校正韓非子解詁全書	[発行年不明]	10	一宮□文館
10	家忠日記	江戸時代写	6	芋芋苑文庫・忠毅堂章
8	拾芥抄	1596～1614	5	榎倉氏蔵書・武園之印
16	虞初新志校正	[発行年不明]	4	学泉斎□・黒田蔵書之記
18	天正軍記	1654(承応3)	4	神奈川青木町本陣鈴木文庫
15	東遷基業	[筆写年不明]	1	仮恵氏蔵書印
6	官板六合叢談	明治期	5	川西文庫
12	岡田文章	1802(享保2)序	4	神戸昌蔵蔵書
9	賈誼新書改正	1790(寛政2)校正補刻	5	国□堂蔵
15	武徳編年集成	江戸時代	21	河野蔵書
11	本朝神社考	江戸時代	6	小林家印
9	孔子家語	1742(寛保2)以降	4	斎明楼図書記
27	大三川志	1801(享和1)序	40	佐々木氏図書記
17	重編応仁記	1711(宝永8)	20	里童
18	本朝武林伝	1679(延宝7)序	3	善宇・長山蔵書
2	梅園日記	江戸甲辰序	4	仙波蔵書・仙波永贇之印
15	廣元日記	[筆写年不明]	63	仙波蔵書・仙波永贇之印
18	参考慶元記	[筆写年不明]	12	仙波蔵書・仙波永贇之印
18	隠頭曾我四氏怨讐記	江戸～明治初写	3	対梅宇主萩原乙彦蔵于俳書二西精舎・避險危斎蔵書
17	前太平記	江戸時代	39	高森書庫
18	北條五代記	1783(天明3)	10	正気堂図書記
8	延喜式	江戸期か	28	鶴文庫
18	御当家令條記	[筆写年不明]	10	長田氏蔵
8	江談抄	[筆写年不明]	1	根津文庫
31	拾璣算法	1769(明和6)	5	東□
12	北辺隨筆	1819(文政2)	4	久寿能屋
18	九州治乱記	江戸時代写	7	久世氏文庫
18	享保通鑑	[筆写年不明]	6	仏心院
17	日本百将伝抄	江戸期	1	堀□□
2	湖月鈔	江戸期か	51	本堂親知蔵書
2	山口栞	1836(天保7)	2	本堂親知蔵書
10	清正記	江戸時代	7	本安
18	右文故事	[筆写年不明]	10	溝東精舎
7	譚海	江戸中期写	15	山津伊・一随書記

註 解読不能な蔵書印の文字は□で示した。

姓名是亦別紙雛形ノ通無遺失取調来申正月月中可差出候事  
 明治5年9月25日、正院が『皇国地誌』編集を管轄することになり、太政官布告第290号によって諸省府県に対して関連書籍や地図類を差し出すように通達した<sup>18)</sup>。明治6年5月8日、太政官布告第149号で再び地誌関係の図書を送り出すように指示した<sup>19)</sup>。同日、太政官布告第153号によって、「皇親ノ御系ニ関係致シ類ノ書籍所持ノ者ハ早々可差出事」との布告が出た<sup>20)</sup>。

明治6年9月18日、太政官布告第320号によって、次のように古典籍や古文書を所有している者は書籍館へ申し立てるようにとの指示が出された<sup>21)</sup>。

古典籍古文書等ノ考証ト相成ヘキモノ蒐集候ニ付各管内社寺学校及ヒ華士族平民等貯蔵ノ品仮令残冊欠本或ハ片紙タリトモ取調ヘ可差出、尤謄写之上返却候条先ツ書目ヲ以管轄庁ヲ経テ書籍館ヘ可申立、此旨布告候事

但献納イタシ度モノハ可願出且皇親御系並地誌関係ノ書類ハ本年第四百九号第五百十三号布告ノ通可相心得事

上記の政府による一連の集書策のなかで、文部省による旧藩蔵書収集については西村正守・佐野力の研究<sup>22)</sup>がある。それによれば、詳細は以下の通りである。

- ①明治4年11月 各府県に旧藩蔵書の目録を提出させた。
- ②文部省は、各府県から提出された目録にもとづいて採選した。朱円を施した書籍は追って指示するまで保存し、それ以外は（文部省に伺い出たうえで）処分差支えなしと指示した。
- ③上記の作業中に、東京書籍館から書籍交付申請を受けたため、各府県に書籍提出を指示した。
- ④明治5年5月以後は、各府県から文部省への書籍処分伺出を東京書籍館に廻付した。同館が独自に再採選し、必要書籍の追加交付を受けた。同館は文部省採選作業に追いつくと、独自に原書目から採選し、文部省に交付を申請した。
- ⑤各府県から提出された書目は、文部省、東京書籍館、正院修史局の間で往復されたが、特に書籍館と修史局で利用の競合が起きた。
- ⑥東京書籍館への交付は明治8年8月から9年9月にかけておこなわれた。

明治4年11月の文部省達を受けた府県は目録を作成した。『長野県教育史』には、飯山・須坂・上田・小諸・岩村田・竜岡・高島・松本諸藩に関わる学校所蔵の書籍や器械などを調査のうえ作成された目録が掲載されている。それらは、明治5年に長野県に報告された<sup>23)</sup>。

岡山県に関しては文部省への対応のあり方を知ることができる。同県では次のような経過をたどった<sup>24)</sup>。

明治5年2月5日、文部省通達にもとづいて管内諸

学校所蔵書籍の目録を進達した。同年11月4日、太政官達第290号にもとづいて、元岡山藩士編集による『吉備温故』について届け出た。翌6年1月22日、『吉備温故』全90冊を正院史官に進達した。

明治8年3月5日、文部省へ明治5年2月に提出した管内学校蔵書目録が還付され、書目中に○印のあるものについては保管し、その他の処分については伺い出るべきことが通達された。8月3日、○印を付した典籍を文部省へ輸送すべき通達があった。10月19日には文部省から、8月に輸送指示した典籍に追加して『玉烟堂法帖』24帖も送り出すべき旨の再達があった。11月12日、岡山県から文部省へ典籍を輸送した。その際、「地誌編輯御用引用致居申ニ付御猶予相願候分、并先般書上ノ節書損、尚現今所在不分明取調中之分等」は輸送リストから除かれた。11月22日、岡山県は、文部省からの明治8年3月の通達にもとづき、「当時難得分据置、其余ハ売却致候テ当今入用之書籍買入申度」と文部省に伺い出た。12月3日、文部省は、岡山県からの11月22日付伺に対して書籍売却を許可し、「売却購求書目代価巨細相調、追テ可届出候事」を指令した。

明治9年1月19日付で、岡山県から差し出された150部の書籍が東京書籍館に交付された<sup>25)</sup>。

愛知県の事例については、須田肇<sup>26)</sup>の研究がある。須田によれば、愛知県は明治9年8月31日に次のような伺を文部省に出している<sup>27)</sup>。

旧藩々引継書籍不用之分売払之儀ニ付伺

県下旧藩々引継書籍書録之内朱点朱圈ヲ以テ御省及愛知師範学校ヘ□(具)出、其余ハ当県適宜之商店ヲ立更ニ伺出ヘク旨兼而御達□□□候ニ付、参考上須要之書ヲ簡抜シ不用ニ属スル書籍払下右価ヲ以テ本県師範学校必用之書籍ニ交換シ同校へ備置致、依而此段相伺候也、

この伺に対し、文部省は同年9月8日付で書籍の売却を許可した。上の史料中の「県下旧藩々引継書籍書録之内朱点朱圈」というのは、明治4年の文部省通達に応じて愛知県が提出した旧藩所蔵目録中で文部省が朱点を施した書籍を指すであろう。愛知県から差し出された101部の書籍は、明治9年5月19日付で東京書籍館に交付されている<sup>28)</sup>。注目されるのは、「県下旧藩々引継書籍書録之内朱点朱圈」を施したものが文部省だけでなく「愛知師範学校」に差し出されていたことである<sup>29)</sup>。当時、愛知県下には官立愛知師範学校と、県立愛知師範学校が併存していた。史料中の「愛知師範学校」が官立を指し、「本県師範学校」が県立を指すと解される。すなわち、愛知県においては旧藩蔵書が文部省と官立愛知師範学校に分けて差し出されたことが明らかである。

この愛知県の事例に即して考えれば、長崎県においても同県が文部省に提出すべく作成した管内諸学校所蔵書籍目録に記載された書籍の一部が、官立長崎師範学校に入れられた可能性がある<sup>30)</sup>。しかし、表4でみる限り現存する書籍には長崎県に関連する旧蔵者の蔵書印はみられない。

表4によれば、官立長崎師範学校蔵書中には、桑名藩立教館、水口藩翼輪堂、宮津藩礼讓館などの藩校の蔵書が入っていたことが知れる。桑名藩校立教館旧蔵書については朝倉治彦の研究がある<sup>31)</sup>。その他の諸藩校蔵書が明治4年11月の文部省の通達に応じて差し出されたかどうかは不明である<sup>32)</sup>。

### (3) 印記からみた蒐集経緯

表4に示した蔵書印によって旧蔵者が明らかになったのは、先述した藩校のほかのような藩や大名などがある<sup>33)</sup>。

藩に関する蔵書印として、「白河」「白河文庫」「桑名」「桑名文庫」がある。いずれも伊勢国桑名藩主松平家の蔵書印だが、陸奥国白河藩に移封され1823(文政6)年に再び桑名に戻るまでの時代(定賢・定邦・定信・定永の4代)は「白河」が入った蔵書印を使用した。

大名・旗本の蔵書印に、内藤義泰の「贖庫」、堀直格の「堀氏／文庫」、朽木綱泰の「朽木文庫」、間部詮勝の「水山文庫」、松平定信の「楽亭文庫」がある。内藤義泰は、1670(寛文10)年に磐城国平藩藩主となった。堀直格は、信濃国須坂藩主堀直皓の男にあたる。『扶桑名画伝』を著わし、国学者黒川春村に『歴代残闕日記』を編修させるなど、文芸に関心が高かった。蔵書家としても知られる。朽木綱泰は旗本で、3万巻余の蔵書があったという<sup>34)</sup>。間部詮勝は、越前鯖江藩

第7代藩主で、幕末に老中首座を勤めた。松平定信は、陸奥国白河藩主であり、老中首座を経て1788(天明8)年に將軍補佐となり、寛政の改革を主導した。著作が多く、蔵書家としても知られる。

儒者や右筆の蔵書印として、林昇(学斎)の「溝東精舎」、森尹祥の「根津文庫」がある。また、「対梅宇主／萩原乙彦／蔵于俳書／二酉精舎」は、戯作者萩原乙彦の蔵書印である。

上記のなかで、堀直格の蔵書については、明治6年の政府の呼びかけに応じて献納されたことが恵光院白によって明らかにされている<sup>35)</sup>。そこで堀直格の献納本リストを探したが、官立長崎師範学校蔵書となった『三秘集』『筆塚』『諸例類纂』は見られない。また、献納以前の幕末に作成されたと考えられる堀直格の蔵書目録「花屋書院略目録」や「常磐園蔵書目録」(いずれも国立国会図書館所蔵)にも当該3冊はない。「花屋書院略目録」花鳥風月4冊のうち風が欠本であるため見られなかった。そこに記載されている可能性はある。

堀直格以外の大名について「浅草文庫献納書目」(東京国立博物館資料館所蔵)を見たが、献納した事実は確認できなかった。朽木綱泰蔵書に関しては、『板倉・朽木・大久保家蔵書目録』で確認したところ、『左経記』20巻を所蔵していたようだが、それと表4の『左経記』が同一か否かは不明である。

松平定信に関しては、その蔵書印である長朱印「楽亭文庫」(二重枠)が『中右記』に捺されているが、藩や藩校の蔵書印もともに捺されている。『小右記』『吏部王記』にも、丸朱印「桑名」(縦書)、長朱印「桑名文庫」(二重枠)、丸朱印「白河」(横書)、長朱印「白河文庫」(二重枠)、長朱印「立教館／図書印」などの

表5 官立長崎師範学校蔵書中の松平家関連書籍

書名	浴恩園文庫書籍目録	白河文庫全書分類目録	明治9年旧藩書交付書目：三重県	国会図書館現蔵冊数	官立長崎師範学校蔵書目録	長崎大学附属図書館現蔵の冊数と蔵書印
中右記	十五冊 ↓ 長崎へ?	八十冊 ↓ 文部省へ?	八十冊	25冊 白河文庫・立教館図書印・桑名文庫	全拾五冊 壺部	15冊：一～十五冊 白河・桑名・桑名文庫・立教館図書印・楽亭文庫
小右記	三十五冊 ↓ 文部省へ?	九冊 ↓ 長崎へ?	三十五冊	35冊(含20冊) 白河・桑名・桑名文庫・立教館図書印・楽亭文庫	全九冊 壺部	6冊：卷一～八(欠三・七) 白河文庫・桑名文庫・立教館図書印・蕉雨園蔵書
吏部王記	—	十二冊 ↓ 長崎へ?	—	—	全拾貳冊 壺部	10冊：二～十二冊(欠十一) 白河文庫・桑名文庫・立教館図書印

註 浴恩園文庫書籍目録：『松平定信蔵書目録一』pp.47-48。白河文庫全書分類目録：『松平定信蔵書目録二』p.89・p.92。

旧藩書交付書目(文部省から東京書籍館への交付書目)：西村正守・佐野力1973年 p.49。

国会図書館現蔵冊数：国立国会図書館古典籍資料室所蔵。

官立長崎師範学校蔵書目録：「旧長崎師範学校蔵書目録」の記載による。

松平家関連の蔵書印が複数押されている。

松平定信の蔵書目録には「白河文庫全書分類目録」と「浴恩園文庫書籍目録」があり、高倉一紀によれば前者は「藩校蔵書としての公的な観点から」、後者は「個人蔵書としての私的な関心から集積された」<sup>36)</sup> というが、三重県から提出され東京書籍館に入れられた書籍には両目録中のものが混在している<sup>37)</sup>。冊数から判断して表5に示したように、「浴恩園文庫書籍目録」中の『中右記』と「白河文庫全書分類目録」中の『小右記』『吏部王記』が官立長崎師範学校に入れられた可能性が高いが、その経緯や理由は不明である。

## おわりに

本稿で述べてきたことをまとめると以下のような。官立長崎師範学校の「参考書」は、授業で直接使用するわけではなく、教員や生徒の研究のために蒐集され、閲覧に供されていた。

新本のほかに、写本を中心として古書も入れられていた。漢籍と和書の種類の比率はおおよそ1対5である。和書は、江戸時代に筆写あるいは版行されたものが、種類のうえで明治期発行物の半分程度を占める。内容は、歴史関連が多い傾向にあるが、ほかにも多岐にわたる。また、西洋情報を漢訳洋書や翻訳書を通じて受容しようとする意図がうかがえる。

入手方法について直接的に明らかにできる史料はないが、宮城師範学校の事例から勘案すると、明治初期に発行された新本を購入することはもちろんだが、文部省から古書の交付も受けていたと考えられる。印記からうかがえる古書の旧蔵者には藩校や大名などが含まれていた。明治初期に正院史官や文部省を中心として、旧藩蔵書の差し出しや蔵書家からの献納などの方途により書籍の蒐集を図っていたから、その過程で交付された可能性もある。

しかし、文部省が諸藩蔵書中から採選した書籍の目録中に、官立長崎師範学校蔵書中の書籍は見られなかった。採選された書籍以外のものが追加で文部省に提出され、それらが同校に交付された可能性もある。あるいは、文部省に提出されなかった藩蔵書が処分され、それが巡って官立長崎師範学校に入ったものかもしれない。

旧大名蔵書については、献納された書籍が文部省管轄下の学校に交付されたことを示す史料すら確認できず、その接点は明らかにできなかった。

官立長崎師範学校に限ると史料の限界があるため、今後は、他の官立師範学校の事例に拡大して調査していく必要がある。

## 【註】

- 1) 『文部省年報』による。『文部省報告』では125名となっている。
- 2) 平田宗史「官立長崎師範学校」『福岡教育大学紀要』32-4, 1982年, pp.109-120。
- 3) 鈴木理恵「官立長崎師範学校の蔵書」『広島大学大学院教育学研究科紀要第三部教育人間科学関連領域』60, 2011年, pp.17-26。鈴木理恵「官立長崎師範学校蔵書に関する報告書」(平成20~22年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(一般))「書物・出版と社会変容」研究の総合化に向けて」研究成果報告書), 研究代表者若尾政希, 2010年。
- 4) 詳細は、鈴木理恵, 前掲註(3)論文を参照。
- 5) 長崎大学附属図書館には、長崎の師範学校関連の和装本、綾装本、洋書が約1,500種約7,800冊、保管されている。それらのなかで「第五大学区/長崎師範学校/校図書之印」(ノは改行を示す)の印記をもつものを官立長崎師範学校蔵書と特定した。
- 6) 本稿では書名や史料中の旧字体・異体字を、それぞれ新字体・通用字に変えた。
- 7) 長崎師範学校書籍局規則第九条に「参考ノ爲メ要用ノ書籍図画及ヒ器械等ハ書器縦覧所ニ於テ拝見ヲ許ス事」、同第四条に「参考ノ爲メ備置ク処ノ書籍ト雖モ二部以上有テ現時差支ナキ分ハ可貸渡事」、同第七条に「参考ノ爲メ備置ク所ノ書籍図画等一部ノ分ハ監事教官ト雖モ宅下拝借ヲ許サ、ル事」とある。
- 8) 漢訳洋書については、岩田高明が「17世紀から19世紀中期にかけて、西洋人が口述し中国人が筆記した書籍、および西洋の書籍・雑誌・新聞等を中国人が翻訳・訳述した書籍」(『漢訳洋書の西洋教育情報—『瀛環志略』『地球説略』『地理全志』の分析を中心にして—)安田女子大学編『安田女子大学大学院開設十周年記念論文集教育学編』安田女子大学, 2003年, p.13)と広義に定義している。本稿でもその定義に従う。
- 9) 八耳俊文編「19世紀漢訳洋書及び和刻本所在目録」、沈国威編『『六合叢談』(1857-58)の学際的研究』白帝社, 1999年, pp.181-241。
- 10) 陳力衛「明治初期における漢譯洋書の受容—柳原前光が購入した書物を中心に—」『東方学』99, 2000年, pp.61-74(のちに『和製漢語の形成とその展開』, 2001年に収載)。松浦章「幕末明治期における漢学受容の変容—漢譯西洋書の受容—」、『アジア文化交流研究』5, 2010年。
- 11) 長崎師範学校書籍局規則第14条に「書籍払下願出候者アル節ハ元価ヲ以テ可払渡事」とある。

- 12) 『文部省第五年報』明治10年, pp.411-412。
- 13) 政府による書籍収集については、以下を参考にした。西村正守・佐野力「東京書籍館における旧藩蔵書の収集」『図書館研究シリーズ』15, 1973年, pp.1-79。広瀬順晴「大名・藩校の典籍と記録三 明治維新と藩校の蔵書」, 『日本古書通信』909, 2005年, pp.22-23。恵光院白「堀直格の著編とその蔵書目録群の相貌(稿)一堀誠斎(?)」, 『文献探索』2007, 2007年, pp.108-142。
- 14) 第267～第269, 内閣官報局編『法令全書明治3年』内閣官報局, 明治20年, p.166。
- 15) 内閣官報局編『法令全書明治4年』内閣官報局, 明治21年, p.141。
- 16) 前掲註(15), pp.217-221。
- 17) 前掲註(15), p.900。
- 18) 内閣官報局編『法令全書明治五年』内閣官報局, 明治22年, p.200。
- 19) 内閣官報局編『法令全書明治六年』内閣官報局, 明治22年, p.199。
- 20) 前掲註(19), p.200
- 21) 前掲註(19), p.479
- 22) 西村正守・佐野力, 前掲註(13) 論文。
- 23) 長野県教育史刊行会編『長野県教育史第七巻史料編一』長野県教育史刊行会, 1972年。
- 24) 「図書目録」, 岡山県立記録資料館編『岡山県記録資料叢書3 岡山県史料三』, 岡山県立記録資料館, 2008年, pp.149-158。「図書目録」は、岡山県所蔵の典籍図画に関して、文部省へ送達した品目やその余を処分した顛末、明治庚午～8年に官許を経て出版した書目などを記録した史料である。
- 25) 西村正守・佐野力, 前掲註(13) 論文, p.17。
- 26) 須田肇「旧尾張藩書籍の引き継ぎと払い下げ一師範学校から民間へ」, 『徳川林政史研究所研究紀要』36, 2002年, pp.125-155。
- 27) 須田肇, 前掲註(25) 論文, p.127。須田によれば、この史料は「旧名古屋税務監督局所蔵史料」のうちX70-43「旧藩引継書籍一件綴(明治十年新製/第五課庶務)で、「おそらくは愛知県庁文書(同論文, p.131)という。筆者は原史料を見ない。
- 28) 西村正守・佐野力, 前掲註(13) 論文, p.18。
- 29) 須田は、「県下旧藩々引継書籍書録」を旧藩から愛知県に引き継がれたものと、「愛知師範学校」を愛知県師範学校と誤解している(前掲註(25) 論文, p.127)。
- 30) 参考のために、岡山・愛知・長崎県が文部省に提出した管内諸学校所蔵書籍目録に掲載されていた原部数と、文部省による採選部数、東京書籍館への交付部数および交付年月日は以下のとおりである。
- 岡山県 明治9年1月19日交付150 / 採選208 / 原3200
- 長崎県 明治9年3月20日交付5 / 採選49 / 原2650
- 愛知県 明治9年5月19日交付101 / 採選138 / 原2900
- 31) 朝倉治彦「桑名藩校立教館旧蔵書の調べ(藩校文書研究の内)」『四日市大学論集』2-1, 1989年
- 32) 『日本教育史資料一』のなかで、藩校蔵書の処分やゆくえに関する記載があるのは以下の諸藩である。文部省へ提出されたほか、各県に納付された場合があったことがわかる。
- 旧大溝藩：蔵書ハ明治八年文部省へ進達スルモノ、外同省ノ裁可ヲ経テ総テ売却ス依テ不詳
- 旧飯山藩：蔵書類ハ廢県ノ際長野県へ残ラス引渡ス
- 旧小諸藩：蔵書目次ハ廢藩ト共ニ散失拳ル嶂能ハス
- 旧沼田藩：蔵書ハ普通経書史類藩主ヨリ寄附ノ分モ有之処廢校ニ付群馬県へ上納セリ
- 旧中村藩：蔵書数千卷アリタレトモ悉ク旧磐前県へ納付ス、其種類部数今得テ詳ニシ難シ
- 旧桑名藩学校については「蔵書ハ和書百八十一部漢書百四十部」、旧水口藩学校については「蔵書ノ種類部数ハ別ニ掲ク」とあるのみである。
- 33) 蔵書印については、以下の文献を参考にした。『図書寮叢刊書陵部蔵書印譜上下』, 宮内庁書陵部, 1996年, 1997年。国立国会図書館『人と蔵書と蔵書印一国立国会図書館所蔵本から一』, 雄松堂出版, 2002年。
- 34) 朝倉治彦監修『板倉・朽木・大久保家蔵書目録第2巻朽木文庫書目』, ゆまに書房, 2004年。
- 35) 恵光院白編「堀直格・花家文庫旧蔵書のうち明治07/1874政府への献納, 以後の目録一国立公文書館・内閣文庫にて閲覧可能な書籍一」, 『文献探索人』2010, 2010年。
- 36) 高倉一紀「解題」, 朝倉治彦監修『松平定信蔵書目録第1巻』, ゆまに書房, 2005年, p.v。
- 37) 西村正守・佐野力, 前掲註(13) 論文に付された三重県から差し出された書籍目録(pp.48-51)と、「白河文庫全書分類目録」「浴恩園文庫書籍目録」を照合すると、両目録中の書籍が混在して文部省に提出されていることがわかる。

## 【付記】

本稿は、平成24年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(一般))「『書物・出版と社会変容』研究の深化と一般化のために」(研究代表者若尾政希)の成果である。